

むらの自然をいかす



守山弘著

発行 (株)岩波書店

定価 1,400円

本書は、現代の農村地域において、かつては普通にみられた生物各種の移動分散能力とともに、二次林、農地、屋敷林、ため池等の環境構成要素の空間的配列とそのメンテナンスの方法・頻度を考察することにより、伝統的な農村の生物多様性をいかにして保全するのかを論じている。

筆者の守山氏は、茨城県南部の国立農業環境研究所内に「ミニ農村」という、小規模な農村環境モデルを造成し、これと周辺の農村地域をセットとしての生物調査を実施しており、本書はその集大成である。

研究の結果の一例を紹介すると、オオイトトンボ、アジアイトトンボ、ショウジョウトンボの3種の移動距離は、前2種が1.2~1.3km、ショウジョウトンボが1.0~1.1kmであるという。しかも、筆者らの研究対象地では、明治時代までは、ほとんどのため池が1km以内の距離に位置し、上記のトンボ類が移動可能だったと論じている。

これが、種の移動分散能力と、伝統的な農村における樹林地、農地、水系の環境構成要素の空間的配列の関係である。では、これらの環境構

成要素のメンテナンスと種の関係については、どうなのか？

「ミニ農村」では、年を変えて一つずつ新しい池を造成しているという。オオイトトンボは、どの池でも造成2年目までは個体数が増加していくが、3年目以降は減少していくという。これは、「オオイトトンボが抽水植物がまばらな水面を好むため、(造成後の時間が経過し)抽水植物が増えるにつれて個体数が減少するのである。」「造成初年度の池は泥上げされ水を張られたばかりの池と同じ状態である。だから年をかえて池をつくっていくことは、年を変えてため池の泥上げを行っているのと同じことになる。」と書かれている。

ビオトープ事業や自然環境復元事

業等の計画策定に際しては、保全・復元目標種が設定されることが多いが、その際、周辺からの種の供給ポテンシャルを評価し、植生管理の方法を考案する段階で、資料不足に悩まされるケースが非常に多い。例えば、トンボ池を創出した場合、どんな種が周辺から飛来してくる可能性があり、かつそれらが定着するためには、どんな植生を有する池が望ましいのか?、といった個々の種の移動と、定着に必要な環境の質に関する情報は十分集積されていない。本書には、トンボ類に限らずこうした情報が数多く紹介されているとともに、情報を得るために必要な調査手法のヒントも示唆されており、まことに有用な一冊であるといえよう。

(本社自然環境調査室・根本淳)

著者紹介

守山弘 (もりやまひろし)

1938年神奈川県平塚市生まれ。東北大学大学院理学研究科(化学専攻)卒業。現在、農水省農業環境技術研究所環境管理部資源生態管理科上席研究官。著書に「自然を守るとはどういうことか」(農村漁村文化協会)等がある。

シリーズ紹介

自然環境とのつきあいかた

- 1 「山とつきあう」岩田修二
- 2 「森とつきあう」渡邊定元
- 3 「川とつきあう」小野有五
- 4 「湿地といきる」樋口広芳
成未雅恵
- 5 「海岸とつきあう」小池一之
- 7 「まちの自然とつきあう」武内和彦

「もっと議論を、もっと協力を」

日本哺乳類学会1997年度大会参加報告 1997年10月9～12日 於 北海道大学

去る10月9～12日、札幌市の北海道大学にて開催された日本哺乳類学会の1997年度大会に出席してきた。

自由集会、一般講演、ポスター発表、シンポジウムとそれぞれの場で熱い議論が交わされた。その中には我々の業務に役立つようなものも多く見られた。

初日の自由集会で村上興正氏（京大）が世話人を務める「哺乳類の環境アセスメントのあり方」という企画が行われた。大型、中型、小型種のそれぞれの研究者から現状と問題点が説明された。その中で我々が調査で用いている河川水辺の国勢調査マニュアルがたたき台とされ、問題点が指摘された。各種共通の問題点として、生息の有無の確認といったレベルの調査しか行われていないことが多く（個体数等生息状況まで詳細にやった調査は少ない）、仮に何かがいたとしても周辺に生息環境が残っていればそれでよい（評価の基準が単純過ぎる）。即ち開発優先型のアセスメントと批判された。小型種の調査はネズミ類のトラップ調査のみでモグラ類、コウモリ類（貴重種多い）は現状の調査では種のリストに入っていない。ネズミ類にしてもワナの設置数や日数も少なく、捕獲されなければ生息していないと判断されていると指摘された。村上氏の言は確かに理想論であるが、行政や事業主が、今後詳細な調査の必要性を感じ、調査のための予算が付くような方向に変わっていくよう研究者からも呼びかけていく必要があるのではないかと感じた。

また今後、今まで以上に我々には調査能力の高さが求められてくると再認識させられた。

2日目の自由集会では昨年結成された「リス・ムササビネットワーク」の第1回集会が行われた。特に印象に残った話題は柳川久氏（帯畜大）による北海道十勝地方におけるエゾリスの交通事故の事例で、行政にアピールを行った結果、リスが道路を横断しなくて済むように木にワイヤーを付け、エコ・ブリッジとしてリスの安全な移動のための施策を行った。哺乳類の移動のための配慮はカルバート等いくつか知っていたが、リスを対象としたものはこれが初めての事例であり、今後の仕事の参考になるのではないかと思った。

また、リス類については分布調査はほとんど行われておらず、どこにどんな種がいるのかわからない。こうした情報をネットワークを活用して集積できないかとの意見が出た。我々のように全国で調査をしていけば、得られたデータで活用できるものも多い。このような貴重なデータをネットワークに提供できるような方向にもっていけないかと考えている。

哺乳類学会では相変わらずシカの発表が多く、大量増加と農林業被害、その防除が議論されていた。しかしどの演者も触れていなかったが、predator（捕食者）の不在という根本的な問題をもっと議論すべきだと感じた。prey animal（被食者）はpredatorの捕食圧があって進化してきた。即ちオオカミの絶滅がシカの増加に大きく関係している。そうした議論が欠けている。

最近では学会にも同業者の方が結構出席されるようになり、研究者も環境調査の分野を真剣に考えるようになってきている。こうしたつながりを今後、深めていき、もっと議論し、もっと協力してよりよい仕事ができるよう努力していかなければならないと感じた。

私自身、学会に出席するようになって久しい。参加するだけでも勉強にはなるが、やはり「学会は発表するところ」であると痛切に感じた。同業者で発表される方も多くなっており、調査等で得られた知見を眠らせず、何らかの形で公開することができるよう尽力していきたいと考えている。それが調査に携わる者の使命であり、責任ではないだろうか。

（大阪支社自然環境調査室・井上剛）

日本哺乳類
学会事務局

〒062 札幌市豊平区羊ヶ丘7

農林水産省森林総合研究所北海道支所鳥獣研究室

事務局長：齋藤隆

TEL 011-851-4131 FAX 011-851-4167

入会は「日本学会事務センター・日本哺乳類学会係」まで

〒113 東京都文京区本駒込5-16-9 TEL 03-5814-5810 FAX 03-5814-5825